

付き従う者の歌

チャンドラムキ・カンパネッラ

シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムが 1979 年に作られた当初、アヌグラハの建物を囲む敷地内に草木や花はほとんどありませんでした。しかしながら長年にわたり、アーシュラムを訪れた多くの人々が敷地全体の景観を整えるためにセーヴァーをささげました。グルマーイが何度も言ってきたように、彼らの愛情のこもった作業のおかげで、今では至る所に絶妙な自然美が見られるようになったのです。その結果、多くの鳥——渡り鳥や一年中住む鳥——がアーシュラムの敷地内にやって来て、聖域を見つけました。

明るい太陽の光が降り注ぐ 2011 年の夏のある朝、グルマーイは、ダルシャンを受ける場所の外の庭にいました。私もそこにいて、何かについて話し合っていました。庭の至る所に——具体的にはアヌグラハ玄関前の端から端まで——ガーデン担当のセーヴァーをささげていた人々が、とても愛らしい花でいっぱいの籠をたくさんつり下げていました。グルマーイの要請で、それらの花籠は外に設置されました。グルマーイは、コマツグミたちがそれらの中で巣を作りひなを育てるのを好むことを発見したのです。

グルマーイは、フクシアが咲いている籠の一つの方に歩いて行きました。それは、グルマーイのダルシャンの場所の床から天井までの大きな窓のすぐ外にある、庭の一等地にありました。

グルマーイは、籠の端まで覆っているフクシアの花の一つに手を伸ばしました。そしてその繊細な花びらを、手のひらに少しの間置きました。

「本当に美しい」と、彼女は優しく言いました。

するとその時、羽ばたきが聞こえました。1羽のコマツグミが籠に降り、その後すぐに少し大きめのもう1羽が来ました。2羽ともくちばしは小枝や泥の塊でいっぱい、すぐに絡み合う花の中にそれらを置きました。その様子から察するとコマツグミたちはカップルで、巣を作っていました。

グルマーイはほほ笑みました。コマツグミたちは家を見つけたのです。

「母コマツグミはいつ卵を産むのかしら」と、グルマーイが独り言をつぶやくのが聞こえました。

数日後、グルマーイは巣の様子を見に行きました。親たちは周りにいませんでした。食べ物を探しに行ったのでしょうか。グルマーイはバスケットの中をのぞき込みました。

そこには、今や完成した巣の中心に抱かれるように、3個の小さな卵がありました。色はターコイズブルーで——後にグルマーイが私に話したところによると——息をのむほど見事でした。

それから毎日、グルマーイは鳥と卵をのぞきにコマツグミの巣を訪れました。それはとても暑い夏のことだったので、彼女はまた、鳥たちが容易に喉の渇きを癒やせるように、近くにある小鳥用の水浴盤に必ず水が満たされているようにしました。やがて、卵の側面に小さな亀裂が現れ始め、それから少し揺れ始め、そしてついに、ひな鳥がかえりました。

ひな鳥がかえり、そしてひなたちに羽が生え始めたその頃、興味深いことが起こりました。親コマツグミたちはグルマーイをよく知るようになったのです——すごくよく。彼らはグルマーイの周りにいると、すっかりくつろいでいるように見えました。時々、母コマツグミはグルマーイがひなを見たがっているのを察すると、ひながよく見えるように、巣を離れて近くの枝に止まりました。グルマーイがその場を去ろうと振り返ると、目の端に、巣に戻って行く母親が見えました。

間もなく、コマツグミと彼らのグルマーイとの交流について聞いていた私たちスタッフの多くもまた、母コマツグミの変った行動に気づき始めました。母鳥が、アーシュラムのいろいろな場所に歩いて行くグルマーイの後をついて行き始めたのです。それが長い距離の時でさえも。あるいは、グルマーイが外で何人かの人々と話していると、コマツグミは最適な木の最適な枝を見つけ、その枝の場所を変えてグルマーイをよく見ようとしていました。そしてもし、グルマーイが中でダルシャンを授けていたら、コマツグミはつり籠の植物の中に止まり——必要に応じて、視界を遮る鳥が現れると平然と追い払うのでした。

ある日の午後、私は建物の別の端に立って、セーヴァーの用事をしていたのを覚えています。突然、鳥のさえずりが聞こえました。大きな鳴き声で、空気を突き刺すようなビブラートの効いた明るい音でした。それはとても根気強いものでもありました。その鳥は明らかに何かを果たそうとしていました。1分が経過しました。2分。3分、5分、7分——それでも、さえずりは続きました。

どんな鳥がこんな風に歌うのか考えてみました。そして、母コマツグミのことを思い出しました。「あの鳥だろうか?」と思いました。「私が前を通り過ぎても彼女はピーとも鳴かない。彼女が歌うのを聞くのは、グルマーイがいる時だけだわ」

すぐに私は考えました。「ちょっと待つて——これはグルマーイが近くにいるっていうこと? それはあり得ない。こんな時間にグルマーイが出歩いているなんて知らないし」

しかし、私は何が起きているのかを知らずにはいませんでした。それで、私は外に出て、鳥のさえずりが聞こえる方に行きました。私はずっと歩いて行って音の出所に近づくと、ついに——案の定——オレンジ色の衣がふわりとなびいているのが見えました。大気中の分子が位

置を変え、再配列し、新しくてより良い調和を生み出しているように感じました。グルマーイがいました。そして、グルマーイの存在を告げるコマツグミがいました。

その光景を見て自分の目が輝くのが感じられました。私の心はとても嬉しくて、興奮を抑えられませんでした！ 気がつくと、空中に両手を上げ、小躍りをしていました。「コマツグミがあなたのために歌っています、グルマーイ！」と、私は叫びました。「あなたのためだけに。本当に、ただあなたのためだけに！」

夏の間ずっと、コマツグミはグルマーイに付き従い続け、月がたつごとに、グルマーイと一緒にいたいという彼女の切望はますます強くなるようでした。彼女の歌声はますます大きくなり、甘くなり、グルマーイにさらに頻繁に付き従っていました。時には父コマツグミもついて来ましたが、大抵は巣に残り、母コマツグミが家族全員への祝福をもらいにグルマーイのダルシャンに行っている間、ひなの世話をしていました。

気候が涼しくなってきた夏の終わりに、コマツグミの家族はより暖かい気候を求めてアーシュラムの敷地から旅立ちました。コマツグミが去った最初の数日間、彼らがいないことは際立っていました。「コマツグミと家族は戻って来るのだろうか？」と考えたのを思い出します。

1年早送りして2012年の6月のことです。再び夏がやって来ました。再び何日も晴れの日が続きました。グルマーイのダルシャンの場所の外にあるつり籠の中の植物は花を咲かせていました。するとすぐに、つがいの見慣れた鳥がその植物の周りに現れ始めました。コマツグミが戻って来たのです！

1年前に来た鳥と同じだとどうして分かったのでしょうか？ それはとても明らかだったのです。私の言葉を信じてください。グルマーイを見るやいなや、母コマツグミは彼女に向かって歌い始めたのです。彼女はグルマーイの後を追って、グルマーイの散歩が終わるまで同行しました。

そしてその時でさえ、グルマーイを中に迎え入れる確かな楽しみを得たいかのように、ドアのすぐそばに降り立つのでした。その上、時折口を開けてグルマーイの前に虫を落とし、ささげ物をするようになりました。

私は思いました。「1年会えなかったことでコマツグミがグルマーイへの思いを一層募らせたなんてことは、あり得るだろうか？」確かにそのように見えました。

その夏のある時点で、グルマーイは、「私にたくさんの愛を示してくれたこれらのコマツグミに名前を付けましょう」と言いました。

グルマーイは、近くを飛んでいた母コマツグミに優しい目を向けました。「あなたはママルー」と、彼女は言いました。それから、同じ愛情のこもったまなざしを、自分の持ち場である巣のそばにいた父親に向けました。「そしてあなたはパパールー」

グルマーイがそれらの鳥に名前を付けるのを聞いて、私はとても感動しました。コマツグミは本当にアーシュラムの生活の一部になり、そして今やその愛称で呼べることを、とてもありがたく思いました。何と言っても私たちはいつも彼らのことを話していましたから！ 例えばある時、グルマーイが私たちのグループに、どのように神がさまざまな姿で訪れ、さまざまな方法でメッセージを与えているかについて話をしていました。間髪入れずに、誰かが大きな声で言いました。「神の一つの姿はママルーです！」

その夏の終わりにママルー、パパールーとその家族が旅立った時、私はそれらのコマツグミを見るのはこれが最後になるに違いないと確信しました。彼らをアーシュラムの敷地で2度目の季節にも見られたことは、驚くべきことだと既に感じていました。

しばらくの間、彼らを再び見ることはありませんでした。しかしその後、2019年5月、ママルーとパパーが初めてアーシュラムの敷地にやって来てから8年ほどたっていました。グルマーイは、つり籠の植物からそれほど遠くないツガの木に、鳥の巣があることに気づきました。それは、不思議な場所にありました。グルマーイがよく歩いてそばを通り過ぎる窓からほんの数インチしか離れていなかったのです。

間もなくして、グルマーイが外を歩いている時、誰かが——何かが——羽ばたきながら彼女にあいさつしに舞い降りました。それは…コマツグミです！ あっという間に、そのコマツグミはグルマーイの後に付き従って彼女に向かって歌い始めました。その行動に気がついて、グルマーイは言いました。「きっとママルーとパパーの子孫——何代目かに違いないでしょう」

グルマーイは、今も毎年、早春のシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムに最初にコマツグミがやって来たのを目にするとママルーとパパーを思い出すと、私に話しました。彼女はまた、特にママルーの後継者かもしれないしるしを探して、目と耳をそばだてています。そして確実に、彼らはやって来ます。グルマーイは、コマツグミの巣を高く目に付く場所に見つけたり、優しい鳥の歌声がとても近くに聞こえた時、彼らが来たことを知るのです。

グルマーイは言いました。「アーシュラムを訪れるすべての鳥や動物は、アーシュラムの人々のことを知っています。渡りの時が来ると行ってしまいましたが、いつも自分たちの人々に再会するために戻って来るのです」

